

教育課題研究

今と将来をよりよく生きる子どもの育成を目指す教育の在り方

～子どもの学びを確かにするカリキュラム・マネジメントの検討～

研究のまとめ

2026年3月

宮崎県立みやざき中央支援学校

目次

ページ

第1章 研究の概要	2
1 研究主題	
2 主題設定の理由	
3 研究の目的	
4 研究の仮説	
5 研究の期間と主な内容	
第2章 研究の経過と各年度の成果	4
第3章 令和6年度までの課題	5
第4章 今年度の取組と成果	6
1 年間指導計画を活用した授業づくり	
2 年間指導計画の作成	
3 年間指導計画活用マニュアルの作成	
第5章 3年間の成果	19
第6章 今後の課題と展望	20
巻末資料	
1 年間指導計画活用マニュアル	
2 年間指導計画活用	
3 単元題材計画シート	

第1章 研究の概要

1 研究主題

「今と将来をよりよく生きる子どもの育成を目指す教育の在り方
～子どもの学びを確実にするカリキュラム・マネジメントの検討～」(3/3か年)

2 主題設定の理由

本校は、「豊かに生きる児童生徒の育成を目指す新たな学びに対応する教育の在り方～学習指導要領を踏まえた授業づくりをとおして～」を研究主題に掲げ、「①現行の学習指導要領に基づいた教育内容の充実」「②新たな学びに対する教育の在り方の検討」「③ICT機器を活用した学習活動の充実」の3つの課題に取り組んできた。

その結果、ICT機器の活用については学校全体としての基盤整備が進み、新たな学びに対応する教育の在り方についても、外部人材の活用をはじめとする多面的な検討がなされ、一定の成果を上げることができた。一方で、現行学習指導要領に基づく教育活動の充実という観点では、本校の教育活動の基盤となる年間指導計画について、カリキュラム・マネジメントの視点から内容及び活用の在り方を十分に検討しきれておらず、改善すべき課題が残る結果となった。

管理職、教務主任、小・中・高等部の各学部主事との協議の中では、次の二点が本校の喫緊の課題として明らかになった。第一に、「学習指導要領に適切に対応した教育課程になっているかの検討が不十分であり、年間指導計画や学習評価の改善・見直しが必要であること」。第二に、「知的障がいのある児童生徒の教育経験が少ない、あるいは初めて担当する職員の割合が増えており、知的障がい教育や特別支援学校学習指導要領について、より深い理解を図る必要があること」である。

これらの課題を踏まえ、研究主題を再確認し、年間指導計画の在り方を中心に据えた3か年の研究計画を立て、組織的・継続的な改善に取り組むこととした。

3 研究の目的

学習指導要領に対応した教育課程、教育活動の見直しをすることで、小学部から高等部までの学びの連続性を重視した一貫性・系統性のある指導につなげる。

4 研究の仮説

小学部から高等部までの12年間の年間指導計画の作成を行うことで、子どもの学びを確実にする基礎づくりとなり、カリキュラム・マネジメントの充実を図ることができるのではないか。

5 研究の期間と主な内容

本研究は、令和5年度から令和7年度までの3か年計画として取り組んでいるものであり、特別支援学校における「今と将来をよりよく生きる子どもの育成を目指す教育の在り方」について、カリキュラム・マネジメントの観点から体系的に検討を進めてきた。研究においては、小学部・中学部・高等部の学びの連続性の強化を中心課題とし、年間指導計画の作成・改善、および年間指導計画を基盤とした授業づくりの実践を主な内容として取り組みを進めた。

1年目(令和5年度)は、課題として顕在化していた、小・中・高における学びの接続の不明確さ、また教科・学部ごとに異なる年間指導計画の様式といった実態を踏まえ、年間指導計画様式の検討と統一化を中心に作業を行った。同時に、学習指導要領に示された各教科の段階に応じた教育課程となるよう、教科ごとに縦

割りの研究班を編成し、小・中・高の指導内容を整理する作業を進め、12年間の単元・題材配列表の作成に取り組んだ。

2年目(令和6年度)は、1年目に引き続き年間指導計画の様式検討を深めるとともに、前年度に作成した単元・題材配列表を基に、年間指導計画の作成に着手した。小学部・中学部・高等部の縦割りの教科別研究班を中心として、各教科における指導内容の位置付けや学年段階の系統性を確認し、学びの連続性がより明確となるよう修正を重ねながら年間指導計画を作成した。

最終年度である本年度は、未作成の教科等の年間指導計画作成を進めるとともに、完成した年間指導計画の質を高めるための授業づくりに重点を置いた。授業づくりについては、教員一人ひとりが「単元題材計画シート」を作成することとした。単元名・時数・対象学年に加え、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何を身に付けさせたいか」を明確化させたうえで、授業計画・授業実践・授業評価を一体的に行った。これにより、学習指導要領に基づいた根拠ある授業づくりが促進され、授業実践を通して年間指導計画の妥当性を検証し、必要に応じて年間指導計画の加筆修正を行うことが可能となった。

以上のように、3カ年にわたる研究を通して、年間指導計画の共通様式の開発、縦割り班による体系的な年間指導計画の作成、そしてその計画を生かした授業づくりを段階的に進めてきた。その結果、小・中・高を通した学びの連続性がより明確となり、学習指導要領に基づく教育課程の整備を着実に推進することができた。

第2章 研究の経過と各年度の成果

令和5年度は、学校全体で年間指導計画の見直しを進めるにあたり、まず各学部の現状と課題の整理から着手した。年間指導計画は、学習指導要領に示された「具体的な指導計画」を根拠として作成されるものであるが、本校で用いられていた様式には、指導目標(3つの柱)、指導内容、指導の順序、指導方法、使用教材、指導時数といった必要な項目の記載にばらつきが見られた。特に、3つの柱に基づく指導目標の記載は全体の14%にとどまり、学部間・教科間の様式や内容の差が大きくなった。現行学習指導要領に照らして整理した結果、①学部ごとに研究の進捗に差があること、②年間指導計画の様式が統一されていないこと、③小・中・高を通した学びの系統性が十分に整理されていないことの3点が、学校全体としての主要な課題として浮かび上がった。

これらの課題に共通理解をもって取り組むため、令和5年度は教員を小学部・中学部・高等部の縦割り班で編成し、12年間を見通した単元・題材配列表の作成に取り組んだ。対象は、日常生活の指導、生活単元学習、国語、算数・数学、音楽、図画工作・美術、体育・保健体育、特別活動の8領域である。作成された配列表は、単元名の羅列にとどまるものや、内容表に近い形のものなど様々であったが、作成過程において学部間の情報交換が促進され、学びの連続性の確保が必要であるという認識を職員間で共有する大きな契機となった。また、研究と並行して教育課程の改善に向けた研修体制の整備も進め、全体研修・ニーズ研修・オンデマンド研修など多様な形式の研修を実施した。事後アンケートでは、多くの教員が専門性の向上や指導支援に役立ったと回答しており、職員の基礎的・基本的な理解を高める機会として機能したことがうかがえた。これらの成果と課題を踏まえ、翌年度となる令和6年度には、年間指導計画の様式検討や各教科の指導内容の具体化へと研究を発展させた。

令和6年度は、学校全体で年間指導計画の様式を検討し、統一的な枠組みを策定した。本校では障がい
の程度による課程区分を行っていないことから、年間指導計画は課程別ではなく学年ごとに1部作成する方針とし、12年間を見通しながら児童生徒の実態に応じて柔軟に活用できる構造とした。また、学習指導要領に示された各段階の内容をどの学年でも漏れなく履修できるよう、単元・題材の配列の整合性を確認しなが

ら作成を進めた。計画に盛り込む項目は、学習指導要領総則編に示される指導目標、指導内容、指導の順序、指導方法、使用教材、指導時数を基本とし、指導目標については学習評価参考資料の考え方にに基づき、学習指導要領の「内容」を記号で示すことで簡潔化を図った。さらに、3つの柱を可視化するため、知識・技能には下線、思考・判断・表現には波線、学びに向かう力には点線を付す工夫を取り入れた。これにより、計画と学習評価との連動性がより明確となった。

年間指導計画の様式は、教科別、各教科等を合わせた指導、特別活動の3種類を整備した。学部・学年・教育課程・授業時数・学習指導要領の段階を明示した上で、単元名、時期、具体的な指導内容等を記載し、学習指導要領との対応が一目で確認できるようにした。これらの様式は、研修部、管理職、学部主事との協議を重ねる中で整理され、共通項目を備えた年間指導計画へと整理されていった。その結果、日常生活の指導、国語、算数・数学、音楽、図画工作・美術、体育・保健体育、特別活動について、12年間を通した年間指導計画の構造が概ね整い、従来の学部ごとで様式が異なり系統性が不十分であった状況から、共通の様式を基盤とする一貫した指導体制への基礎が整った。

さらに、校内研究アンケートでは、回答者100名のうち、学習指導要領や「星本」に関する新たな理解を得たとの回答が32%、一貫性・系統性に関する気づきが12%、自身の学びに関する記述が19%に上った。また、学習指導要領を「普段から参照している」職員が43%、「校内研究をきっかけに参照するようになった」職員が24%となり、年間指導計画の作成を通して学習指導要領を基盤とした授業づくりが定着しつつあることが示された。

第3章 令和6年度までの課題

令和6年度までに、子どもの学びを確かなものにするカリキュラム・マネジメントの一環として年間指導計画の作成を進めてきたが、いくつかの課題が明らかになった。まず、生活単元学習については、各学部の1年生の年間指導計画は概ね完成したものの、2年生以上の計画は未整備のままであった。特に中学部の計画では、「夏のくらし」「〇〇に行こう」など季節や行事に依存した題材が多く、学習指導要領に示される指導内容を十分に履修できる構成とはなっていなかった。また、生活・理科・社会など教科別の指導内容が計画に十分に位置付けられていないため、未履修の内容が多く生じている点も課題として浮上した。生活単元学習は教科との関連が大きく、内容の精査には時間を要することから、校内研究の範囲内で十分に検討しきれず、次年度以降も継続して作成に取り組む必要があることが確認された。

生活単元学習以外の年間指導計画については、形式としては作成できたものの、小学部から高等部まで一貫性・系統性のある学びを実現するための十分な精査や、授業実践による検証には至らなかった。作成した計画が実際の授業で活用可能であるかどうかについての検証ができていないため、今後は授業での試行を通して、必要に応じて計画の改善を図っていくことが求められる。

さらに、今回作成の対象とした年間指導計画は、校内研究の時間や縦割りグループでの活動を踏まえ、小学部から高等部に共通して教育課程に位置付けられている「日常生活の指導」「生活単元学習」「国語」「算数・数学」「音楽」「図画工作・美術」「体育・保健体育」「特別活動」に限定した。したがって、中学部・高等部でのみ位置付けられている作業学習や家庭科については未作成のままである。学習指導要領解説（総則編）で示される「すべての児童生徒に履修させること」という原則を踏まえると、今後は本校の教育課程に位置付けられているすべての教科等について年間指導計画を整備する必要がある。

また、年間指導計画の活用面においても課題が見られた。校内アンケートでは、最も多かった意見として「年間指導計画を全職員が閲覧できるようにしてほしい」という声が挙がった。現状では学部ごとに保存場所が異なり、全校で共有される仕組みが十分でないことが明らかになった。星本や教科書解説などの参考

資料の整備・活用を求める意見も多く、授業づくりにおいて参考書の使用が広がりつつあるものの、資料環境の充実が求められる状況である。さらに、授業計画案の様式の統一や、児童生徒がどの段階の年間指導計画に基づいて学習したかを記録し、適切に引き継ぐための仕組みづくりなど、実務面の整備も今後の課題として確認された。

これらの課題を踏まえ、令和7年度は、学習指導要領に沿った教育課程の見直しを継続するとともに、作成した年間指導計画を授業実践の中で検証し、必要な修正を加えることとした。また、年間指導計画の具体的な活用方法や職員向けの参考資料等の環境整備を進め、最終的には本校の教育課程に位置付けられる年間指導計画として完成させることを目指すこととした。

第4章 今年度の取組と成果

これまでの課題を踏まえ今年度は、①年間指導計画を活用した授業づくり、②年間指導計画の作成③年間指導計画活用マニュアルの作成の3点について取り組むこととした。①、②については、小学部・中学部・高等部の縦割りの研究班を編成し取り組むこととした(図1)。A班・B班による年間指導計画を活用した授業づくり、C班・D班による年間指導計画の作成、の大きく4つの班により進められ、全校的に「年間指導計画の活用」と「年間指導計画の整備」を同時に推進する形とした。③については、研修部を中心に、年間指導計画を活用した授業づくりの手順書を作成することとした。以下に研究計画(図1)について示す。

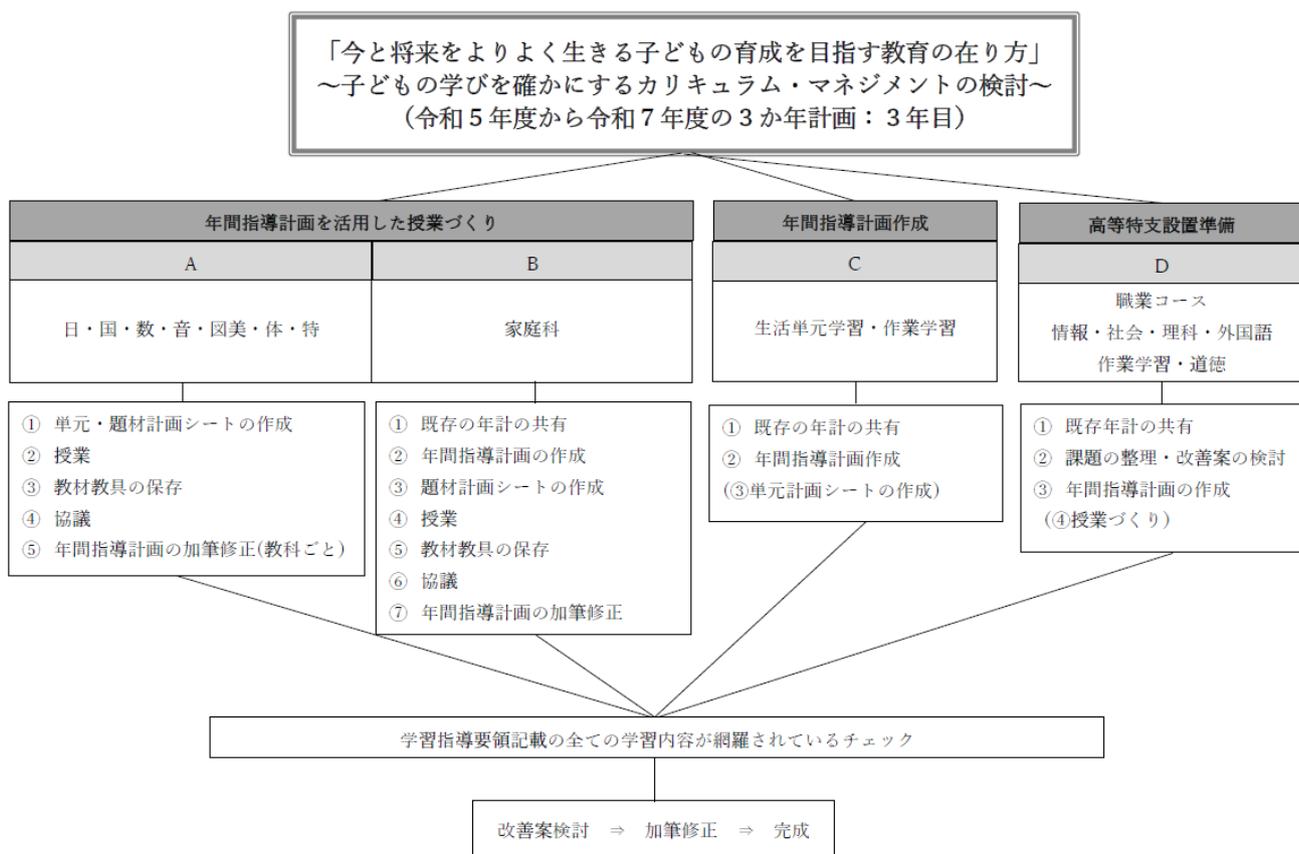


図1 研究計画

取組と成果について以下に記載する。

1 年間指導計画を活用した授業づくり (A班・B班)

本年度(令和7年度)は、これまでに作成した年間指導計画を授業づくりへと生かすことと作成された年間指導計画を評価することの2点を重点とし、全職員が年間指導計画を基にした「単元・題材計画シート」(図2)を作成し、授業の実践と年間指導計画の評価を行った。このシートは、単元名や時数、年間指導計画上の扱いに加え、何を学び、どのように学び、何を身に付けさせたいのかを明確にできる構成としたもので、学習指導要領との整合性を踏まえた授業計画を具体化する役割を果たすことを目的としている。また、単元終了後には、内容の妥当性や指導計画との一致、児童生徒の学びの状況などを振り返ることで、授業改善と年間指導計画の評価・見直しへつなげることも期待した。

以下表1から表8にA・B班、各グループの研究の成果と課題について報告書として示す。

1. 単元・題材の概要

教科・領域		期間	※年間指導計画上の学部学年を記載。		
単元・題材名		対象学年等	部	年	課程
単元・題材の総時数		年計記載学部学年	学部	年	
授業形態		授業者			

2. 単元・題材計画等

時数	主な学習活動	学習指導要領に示されている内容			教科用図書・教材教具等
		学部	段階	内容	
	「何ができるようになるのか」			「何を学ぶのか」	「どのように学ぶのか」
	※ 時間/総授業時数			※年間指導計画を参考に、本単元・題材で取り扱う各教科の内容を記載。追記や変更可。	
	※箇条書きで記載				※年間指導計画を参考に、本単元・題材で取り扱う教科用図書や教材教具を記載。

図2 単元題材計画シート

報告書

研究班 ※A~D	A
教科等名	日常生活の指導
取組内容 ※箇条書き	<ul style="list-style-type: none"> ・年間指導計画の加筆・修正 ・単元題材計画シートの作成 ・単元題材計画シートや授業実践の共有
成果	<ul style="list-style-type: none"> ○毎日の積み重ねや繰り返しの指導の大切さを改めて感じた。 ○実践を進めていく中で子どもたち同士のコミュニケーションが増えた。 ○学習指導要領を見直す良い機会となった。 ○単元・題材計画シートを作成したことにより、項目ごとに学習指導要領のどの部分を目標として持っているか等再確認することができた。 ○熊本大学の指導内容確認表が見やすく、作成に活用できた。

	<p>○適切な清掃の方法が身に付きつつある。</p> <p>○交通安全について、内閣府のホームページを活用しながらクイズ等で楽しく授業を受ける様子が見られた。</p> <p>○単元・題材計画シート作成することで、子どもたちの実態をよく知る良い機会にもなった。</p> <p>○高等部段階であるが、高等部の内容から目標設定するのは難しく、小～高までの年間指導計画があることで小学部段階の目標があっていると感じ、生徒の実態を知ることにもつながった。</p> <p>○単元・題材計画シートは特に初任者の先生、初めて知的の特別支援学校で働く人、初めて経験する学部がある人等にとって授業を進めていく上でとても役に立つ・有効的なものであると感じた。</p>
<p>課題と改善案</p> <p>●課題</p> <p>⇒改善案</p>	<p>●学級の児童生徒の実態が様々であるので、どこに焦点をあてて作成すればよいか迷った。 ⇒クラス全体としての授業実践であったので、目標設定等に苦慮された部分があると思う。 今後も全体として指導する際には、実態把握を大切にしながら、全体を考えつつ、個別の目標も意識しながら取り組む必要はあると思う。</p> <p>●単元題材計画シートでは、自立活動の項目はなかった。 ⇒今回は年間指導計画を基に単元・題材計画シートを作成したので、自立活動については記載はしなかったが、今後記載することを検討しても良いのではないだろうか。</p>
<p>参考資料</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編(小学部・中学部) ・特別支援学校学習指導要領解説 知的障害者各教科等編(上)(下)(高等部) ・熊本大学 指導内容確認表 ・せいかつ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ 教科書解説 ・たのしい家庭科～わたしの暮らしに生かす～ ・たのしい職業科～わたしの夢につながる～ ・暮らしに役立つ 家庭
<p>その他</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・特になし

表1 A班(日常生活の指導)

報告書

<p>研究班</p> <p>※A～D</p>	<p>A</p>
<p>教科等名</p>	<p>国語</p>
<p>取組内容</p> <p>※箇条書き</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・年間指導計画を使った単元・題材計画シートの作成 ・単元・題材計画シートを活用した授業実践 ・年間指導計画の修正・追記の有無について
<p>成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○単元ごとの時数や教材が明確になり、授業づくりや教材研究を深めることにつながった。 ○学習内容、指導上の留意点、学習指導要領の内容が一覧化されていて計画が立てやすかった。 ○単元ごとの時数や教材が明確になり、授業づくりや教材研究を深めることにつながった。

	○系統的な指導につなげることができた。
課題と改善案 ●課題 ⇒改善案	●実態差のある学級や学習グループでの授業作りについて ⇒基本的な視点や工夫していることについて意見交換を行うことができた。 ●年間指導計画の指導内容や教材教具等には☆本の内容が記載されているが、児童・生徒や職員が☆本を持っていないことがあった。 ⇒年間指導計画を活用して授業を行う際に、☆本の解説のねらいや指導例を参考にしながら授業を行っていく。 ⇒年間指導計画を加味した教科書採択も検討していただきたい。☆本教科書解説について、職員がすぐ手に取れるような環境があるといい。(場所や冊数)
参考資料	・特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編(小学部・中学部) ・特別支援学校学習指導要領解説 知的障害者各教科等編(上)(高等部) ・熊本大学教育学部附属特別支援学校作成「学習内容確認表」 ・こくご☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆教科書解説 ・国語☆☆☆☆国語☆☆☆☆教科書解説 ・くらしに役立つ国語 ・くらしに役立つワーク国語
その他	・特になし

表2 A班(国語)

報告書

研究班 ※A~D	A
教科等名	算数・数学
取組内容 ※箇条書き	・年間指導計画を使った単元・題材計画シートの作成 ・単元・題材計画シートを活用した授業実践 ・年間指導計画の修正・追記の有無について
成果	○学習指導要領の内容を明記することで指導の根拠が明確になり、扱う内容を意識しながら授業づくりを進めることができた。 ○どの時期にどの内容を扱うかが明確になり、教材研究や準備に十分な時間を確保できた。 ○系統性を意識した授業づくりにつながった。
課題と改善案 ●課題 ⇒改善案	●実態差のある学級や学習グループでの授業作りについて ⇒基本的な視点や工夫していることについて意見交換を行うことができた。 ●年間指導計画の指導内容や教材教具等には☆本の内容が記載されているが、児童・生徒や職員が☆本を持っていないことがあった。 ⇒年間指導計画を活用して授業を行う際に、☆本の解説のねらいや指導例を参考にしながら授業を行っていく。 ⇒年間指導計画を加味した教科書採択も検討していただきたい。☆本教科書解説について、職員がすぐ手に取れるような環境があるといい。(場所や冊数)

参考資料	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編(小学部・中学部) ・特別支援学校学習指導要領解説 知的障害者各教科等編(上)(高等部) ・熊本大学教育学部附属特別支援学校作成「学習内容確認表」 ・さんすう☆さんすう☆☆さんすう☆☆☆ 教科書解説 ・数学☆☆☆数学☆☆☆☆教科書解説 ・くらしに役立つ数学 ・くらしに役立つワーク数学
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・単元・題材計画シートに単元・題材の目標を記載する欄があるとよかったのではないか。 ・年間指導計画の授業時数については、児童・生徒の理解に応じた時数の増減の検討が必要との意見もあった。

表3 A班(算数・数学)

報告書

研究班 ※A~D	A
教科等名	音楽
取組内容 ※箇条書き	<p>【年間指導計画の作成】</p> <p>【小学部】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨年度未完成だったため、それぞれの学年グループで楽曲の照らし合わせ等を行いながら年間指導計画の作成を行った。 <p>【中学部、高等部】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年計の見直しを行い、来年度への修正を行った。 →年計の見直しに伴い、具体的な教材教具等の検討をした。 <p>【題材評価シートの作成】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年間の中でそれぞれ一題材取り上げ、作成。
成果	<p>【小学部】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○昨年度作成した年計を基に授業を行った。 ○楽曲の整理ができたのがよかった。楽曲を取り扱う適切な時期(年度)を整理できた。 <p>【中学部】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○年計自体は授業づくりにも役立てることができた。 ○年計を基に授業者同士で授業内容のすり合わせを行うことで、系統性のある授業を組み立てることができた。 <p>【高等部】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○年計を意識しながら、授業づくりに取り組むことができた。 ○音楽科で目指す資質・能力である、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化をより意識することができた。
課題と改善案 ●課題	<p>【小学部】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●☆本の音源(CD等)も無く、YouTube等にも無し。☆本で取り扱っている楽曲の中には

⇒改善案	<p>聴きなじみがないものもあり、授業準備にも時間がかかる場合がある。</p> <p>⇒ねらいが達成できる楽曲に変更することも今後検討もよいのでは。</p> <p>●昨年度はそれぞれの学年ごとに作成したため、楽曲の重複が見られた。</p> <p>⇒それぞれの学年で照らし合わせ、楽曲の整理を行った。</p> <p>【中学部】</p> <p>●学年で楽曲が重なっているものもあり、楽曲の整理が必要。</p> <p>⇒訂正済み。</p> <p>●中学校音楽の授業の曲も扱ってもよいのではないか。(共通教材も含め)</p> <p>⇒今後検討。</p> <p>【高等部】</p> <p>●扱う学習内容や楽曲の整理が不十分である。</p> <p>⇒高等部の音楽の目標をふまえ、領域の整理をした上で、扱う学習内容や楽曲の整理を行い、題材名の変更を行った。</p>
参考資料	・学習指導要領 ・おんがく☆本 教科書解説 ・MOUSA Tutti 教科書解説
その他	・特になし

表4 A班(音楽)

報告書

研究班 ※A~D	A
教科等名	図画工作・美術
取組内容 ※箇条書き	<ul style="list-style-type: none"> ・年間指導計画の共有 ・授業づくりの検討 ・題材計画シートの作成 ・実践報告 ・成果と課題の整理
成果	<ul style="list-style-type: none"> ○図工・美術に関する他学部の内容を把握でき、現状について知る機会となった。 ○題材について、児童生徒の実態に合わせて見直すことができた。 ○各学年で取り扱う題材を確認しながら、系統性を考えるきっかけができた。 ○他学部での具体的な授業の内容を知ることができたことと併せて、それぞれが抱えている課題を共有することができて良かった。 ○教科としての情報共有の場になった。
課題と改善案 ●課題 ⇒改善案	<ul style="list-style-type: none"> ●実際の授業時数や児童生徒の実態により年間指導計画通りに進まないことが多い。 ⇒活動内容に幅をもたせ、児童生徒の実態差や制作の進み具合の差に対応できるようにする。 ●題材が児童生徒の実態から見て難しいことがある。 ⇒児童生徒の実態に合わせて題材を柔軟に変更していく。 ●行事などの兼ね合いもあり、年間指導計画通りに進まないことがある。 ⇒時期の変更も柔軟にできるようにする。

	<p>●年計は、年間の授業内容の大まかな流れを示すという捉えで取り組んでいかないと、生徒たちの実態とマッチしないことが多い。</p> <p>⇒年計を基本にしなが、毎年生徒の実態に合わせてアップデートしていく必要がある。それをその年度の記録として残して、次年度に引き継いでいくことが大事である。</p>
参考資料	<p>・学習指導要領</p> <p>・熊本大学教育学部附属特別支援学校 図画工作／美術 指導内容表</p> <p>・小学校図画工作 開隆堂 1・2上下 3・4上下</p>
その他	<p>・教科書のQRコードで参考作品や説明動画を見ることができ、教材に活かすことができた。</p>

表5 A班(図画工作・美術)

報告書

研究班 ※A～D	A班
教科等名	特別活動
取組内容 ※箇条書き	<ul style="list-style-type: none"> ・単元題材計画シートの作成 ・単元題材計画シートを活用した授業実践の発表(共有) ・年間指導計画の加筆・修正
成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 単元・題材シートを作成して授業を実施したことで、学級活動の年間指導計画の目標や具体的な指導内容等を見直すことができた。 ○ 学習内容の検討や新たな教材づくりができたのでよかった。 ○ 学習指導要領に沿った授業を展開するために、特別活動で取り扱ってきた「せい教育」の内容を見直した。現状では、「せい教育」に含まれている内容の多くが、体育・保健体育(保健領域)や小学部の生活科、中学部の職業・家庭、高等部の家庭科など他教科で取り扱う内容と重複していた。そこで「せい教育」の見直しを行った結果、日常生活の指導や保健体育等で取り扱うべき単元や学習内容を整理することができた。また、この見直しにより、特別活動の時間に新たに防災学習やキャリア教育の一環でもあるキャリアパスポートを特別活動の年間指導計画に加筆することができた。 ○ 他学部の授業の取組が分かり、様々な工夫がされていることがわかった。
課題と改善案 ●課題 ⇒改善案	<p>● 「せい教育」の授業形態は、一斉授業が多く、小学部は金曜日の5校時、中学部は金曜日の1校時、高等部は水曜日の1校時に設定されているため、授業時間は実質20分程度の実施となっている。児童生徒の実態によっては、朝の準備や下校時間に時間を要するため、授業に参加できていない児童もいる。</p> <p>⇒せい教育の授業形態については、せい教育検討委員会での検討事項になる。実施校時の設定についても、学部での検討が必要。(他校では特活を2校時に設定している学校もある)</p> <p>授業を入れ替える案もあるが、実際には中学、高等部の通常学級は入れ替えが難しく、20分の実施しかできないのであれば、その時間で内容を押さえることができるよう内容を精選するしかないのではないか。</p>

参考資料	・教育課程編成資料集 ・学習指導要領 特別活動編
その他	・特になし

表6 A班(特別活動)

報告書

研究班 ※A~D	A班
教科等名	体育・保健体育
取組内容 ※箇条書き	・単元題材計画シートの作成 ・単元題材計画シートを活用した授業実践の発表(共有) ・年間指導計画の加筆・修正
成果	○ 単元題材計画シートを作成し、授業実践を行ったことで単元や題材の位置づけについて理解が深まった。 ○ 単元題材計画シートを基に授業実践の発表を行うことで、他学年、他学部の授業の様子や教材等を知ることができた。繋がりのある教育・授業を行っていくことの必要性を感じることができた。 特に中学部の武道の授業では、剣道と柔道の専門の先生がおり、生徒の実態に合わせながら、より実践的な内容に取り組まれていた。 ○ 昨年度に作成した年間指導計画を見直しながら、単元題材計画シートを作成し、授業実践をすることができた。
課題と改善案 ●課題 ⇒改善案	● 種目によって時数の調整を行っていくことが必要だと感じた。(時期や内容に重視したい種目によって異なるため) ⇒年度始めに各学部保健体育科又は、体育担当で実施する種目の内容や時数の検討・確認を行う。また、必要に応じて、学期ごとや次の単元(種目)に入る前にも確認を行う。
参考資料	・熊本大学教育学部附属特別支援学校の学習指導要領に基づいた「学習内容確認表」 ・令和3年「新しい保健体育」単元一覧表
その他	・せい教育の見直しにより、特別活動で取り扱っていたせい教育の単元(保健分野)を体育の授業で行うことになった。体育の授業では行いが、「せい教育」の指導については、例年同様に教職員全員で取り組んでいく。

表7 A班(体育・保健体育)

報告書

研究班 ※A～D	B
教科等名	家庭科
取組内容 ※箇条書き	<p>【既存の年計の課題の整理】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 指導内容確認表で各学年の指導内容をチェック。 <p>【新書式への書き換え作業】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 標準授業時数(家庭一般、食物各35時間)での作成 <p>【単元・題材計画シートの作成】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 前期で実践した題材をもとに作成。 <p>【実践報告・協議】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 高1家庭一般 ～「ランチョンマット製作」「衣服の畳み方、身の回りの整理整頓」 ・ 高1食物 ～「朝食を作ろう(調理実習)」 ・ 高2家庭一般 ～「家族の安全や快適さを考えた住空間(防災)」 ・ 高2食物 ～「加工食品について(調理実習)」 ・ 高3食物 ～「健康的な食生活とバランスの良い献立(栄養)」
成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 年間指導計画について、学習指導要領の内容を網羅できていることが確認できた。 ○ 単元題材シートを作成することで、担当以外の内容や授業づくりの工夫(タブレット端末の利用法等)について情報を得ることができた。また、このシートを作成したことにより、専科外の職員が授業を担当する場合でも参考資料として活用できると考えられる。 ○ 生徒の実態に応じた3年間の学びの連続性を振り返る機会になった。
課題と改善案 ●課題 ⇒改善案	<ul style="list-style-type: none"> ● 教科書「くらしに役立つ家庭」を活用する場が少ない。 ⇒ p48 調味料の重さと量、p77～玉結び、玉止め、p108～さまざまな購入方法と支払い等すべてのページではなく、使いやすいところから活用する。 ● 食物分野における調理実習の系統性がない。 ⇒ 1年:朝食、2年:昼食、3年:弁当で考えていくとよい。調理の基礎基本(被服も含む)については、繰り返しの学習という部分も大切にしていきたい。 ● 前期と後期を入れ替えて実施しているが、5校時授業が入ることで、2グループの授業時数に偏りが出ることもある。 ⇒ 年度初めに1年間の見通しを立て、できるだけ授業時数が偏らないように入れ替えを行う。 5校時で調理ができない場合は、授業の入れ替えて2時間確保していくことも視野に入れる。
参考資料	<ul style="list-style-type: none"> ・ 熊本大学教育学部附属特別支援学校 指導内容表 ・ 調理実習で活用できそうな動画サイト ～「デリッシュキッチン」「クラシル」 ・ マクドナルドオリジナルデジタル教材「食育の時間+(プラス)」
その他	・特になし

表8 B班(家庭科)

2 年間指導計画の作成(C班・D班)

前年度までに未完成であった教科・領域については、既存の計画を参考にしつつ、新たな書式に合わせた作成や内容の整理を進めた。生活単元学習については、昨年度同様に小学部・中学部・高等部の縦割りの研究班を編成し、学習内容の漏れが生じやすい生活、理科、社会、職業家庭について未履修の項目がないようにチェック作業を行いながら作成を進めた。中学部・高等部の作業学習については、中学部・高等部の作業学習チーフの職員を中心に、高等部専門教科については担当する職員を中心にした研究班を編成し、年間指導計画の作成と授業改善を並行して進めることで、学校全体の教育課程の系統性を高める取組が進展した。

以下表9から表11にC・D班、各グループの研究の成果と課題について報告書として示す。

報告書

研究班 ※A~D	C
教科等名	生活単元学習
取組内容 ※箇条書き	<p>【年間指導計画の作成】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨年度の年間指導計画を元に、見直し・修正・確認を行った。 ・今年度提示された年間指導計画たたき台の具体的な指導内容を加筆・修正した。 ・単元の具体的な指導内容を見ながら、授業時数の検討を行った。 ・熊本大学教育学部附属特別支援学校指導内容確認表や指導要領を元に学習指導要領に示されている関連する各教科の指導内容を検討した。
成果	<p>【小】○年間計画のたたき台を見ながら、教科の偏りがいないか確認することができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○教材・教具等も丁寧に表示しており、活動内容が想像しやすいものができた。 ○各教科に分けて作成したことで、改めて整理ができ、統一された体裁に仕上がった。 ○指導要領や星本に改めて触れる機会となり、自己研修に繋がった。 <p>【中】○関連する各教科の指導内容を整理することができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○以前に比べて指導内容と目標が記入されていて活用しやすいものになった。 <p>【高】○年間の単元内容が整理され、指導する際の手立てとなるものになった。</p>
課題と改善案 ●課題 ⇒改善案	<p>【小】●「学習指導要領の指導内容の選択」は個人(教員)によって基準が違ってしまいやすい。</p> <p>⇒学年、学部で指導内容の選択理由を共有したり、使用したりしながら加筆修正していく。</p> <p>●要素を選択していく段階で、迷いが生じ、苦慮する部分があった。</p> <p>⇒学習活動の重点的な目標が何かを精選していくことで、要素が明確になるのではないかと。</p> <p>●年度ごとに学年の考え方・授業の進め方・実態等が異なるため、学年の年計(学習指導要領の目標のどれを選択するか)を作成するのが難しい。</p> <p>⇒今回作成した年計が、「令和○年度入学児童を想定して作成」という記録を記載する。</p> <p>●指導要領解説と内容確認表と記号が少し違う箇所があった。</p>

	<p>⇒内容一覧表の記号一覧があるとよい。</p> <p>●指導内容が記号だけでは、分かりにくい。</p> <p>⇒PC上でクリックしたら、その内容の学習指導要領にリンクする、などできたらありがたい。</p> <p>⇒ユニバーサルデザインにしたら見やすく、活用しやすいのではないか。</p> <p>【中】●季節や行事の単元に時数を多くとるため、理科や社会の内容を網羅するような指導内容を入れる時数が十分確保できない。</p> <p>⇒指導内容の精選。他の、合わせた指導の中で(日生・作業など)意識して取り組んでいく。</p> <p>【高】●実際に取り扱っている単元内容と学習指導要領に書かれている学習内容の段階に差がありすぎる部分があるため、高3に近づけば近づくほど、学習指導要領に示されている関連する各教科の指導内容が限られてきていた。</p> <p>⇒学年が上がっていけばいくほど、他の合わせた指導で補っていく必要がある。</p>
参考資料	<ul style="list-style-type: none"> ・熊本大学教育学部附属特別支援学校作成 指導内容確認表 ・特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編(小学部・中学部・高等部) ・星(☆)本(特別支援学校知的障害者用著作教科書)
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・特になし

表9 C班(生活単元学習)

報告書

研究班 ※A~D	C
教科等名	作業学習
取組内容 ※箇条書き	<p>【年間指導計画の作成】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年間指導計画の様式についての確認、及び、作業学習の内容に関する資料や書籍について確認した。 ・現在の中学部、高等部の作業学習について集約し、年間指導計画の共通様式へ反映させていく形で作成した。
成果	<ul style="list-style-type: none"> ○学校全体の共通様式に沿った中学部、高等部の年間指導計画を作成することができた。 ○各教科等を合わせた指導であることを踏まえ、作業学習の各作業班における内容について、中心となる各教科の内容を整理することができた。 ○各作業班で作業内容が異なるが、事前事後学習など内容が共通する部分については、それぞれの年間指導計画に共通して記載をした。

<p>課題と改善案</p> <p>●課題 ⇒改善案</p>	<p>●作成する上での共通理解は資料等で行い、校内研究の時間は年間指導計画の作成が中心となってしまったため、各作業、各学部の共通部分やつながりについての話し合いの場を多く設けると良かった。そうすることで、年間指導計画の内容をより深めることができたのではないかと。</p> <p>⇒限られた校内研究の時間を効果的に活用していくことは、今後の課題である。今年度は年間指導計画の完成を優先して取り組んだが、今後、見直しや改善を重ね、内容の充実を図っていけると良い。</p> <p>●詳細な内容まで記載することは難しかった。作業学習のチーフは毎年同じ職員が担当するとは限らないため、担当者によって製作品や作物等が変更となる場合がある。そのため、年間指導計画には中心的な内容を示しつつ、一定の幅をもたせた記載としている。</p> <p>⇒高等特別支援学校の開設に伴い、作業教室の変更等、中学部・高等部における作業学習を進める環境は、今後大きく変化していくことが想定される。また、職業コースの今後の動き等も踏まえると、作業班の編成や学習内容については、将来的に見直しが必要となる可能性がある。本校全体としての作業学習の方向性によっては、チーフにかかわらず、製作品や作物等の内容が変更されたり、一定の形で整理されたりすることも考えられる。そのため、今回作成した年間指導計画に基づいて指導を進めつつ、今後の状況の変化に応じて、見直しや改善が必要となる。</p>
<p>参考資料</p>	<p>・「職業・家庭☆☆☆☆職業・家庭☆☆☆☆教科書解説」 ※中学部1・2段階の内容ではあるが、中学部だけでなく高等部も活用できるものだった。</p> <p>・熊本大学教育学部附属特別支援学校作成「学習内容確認表」</p>
<p>その他</p>	<p>・作業学習の年間指導計画作成にあたり、各作業班の全てのチーフが作成メンバーとして関わることができると良かった。</p> <p>・販売活動を行っていることから、各作業班において何を作って販売するかといった面に目が向きやすい。特定の作業のスキルの向上だけでなく、働くための力を幅広く身に付けていくことが大事であることに気付くことができた。各班で共通する学習内容を踏まえた指導を行いながら、中学部のしごとチャレンジ(校内実習)や高等部の産業現場等における実習へとつなげていくことで、日々の作業学習の中で培ってきた力を発揮できる機会となっていくと良い。</p>

表 10 C 班(作業学習)

報告書

<p>研究班 ※A~D</p>	<p>D</p>
<p>教科等名</p>	<p>職業コース</p>
<p>取組内容 ※箇条書き</p>	<p>【年間指導計画の作成】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他校(高等特別支援学校)の年間指導計画を収集した。 ・参考になりそうな学校を2校に絞った。(さくらの杜高等支援学校・流山高等学園)

	<ul style="list-style-type: none"> ・TIを担当する教科について年間指導計画を作成した。 ・職業コース職員で共有した。 <p>【学習の履歴シートの作成】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今年度取り扱った単元・題材名の記録 ・月ごとの反省(●課題と→改善案、○成果)の記録
成果	<p>○他校の年間指導計画を参考にしたことで、年度内に完成することができた。</p> <p>○学習の履歴シートを作成することで、課題や改善案をその都度検討し、記録することができた。来年度の職業コース職員に対しての引継ぎ資料にもなると考える。</p> <p>○職業コースを高等支援につなげるため、学習内容や作業学習の分野、デュアルシステム型現場実習の幅を拡充した。一般就労を目指す職業コースとして、来年度開校予定の3地区の時間割に近い形で実践できたことは効果的であった。</p>
課題と改善案 ●課題 ⇒改善案	<p>●デュアル実習や学校見学会等、すべきことが相次ぎ、計画通りに学習を進めることが難しかった。</p> <p>⇒来年度は、年度初めにある程度の実習や行事等の計画を行い、職員、生徒ともに無理のない範囲で実施したい。</p> <p>●専科の職員がいない科目の年計作成が難しかった。</p> <p>⇒他校の年計を参考に作成を進めたが、適切な計画になっているのかの判断が難しかった為、毎年学習を進める中で加筆修正を行ってほしい。</p> <p>●出張が多く、D班の職員で集まって協議する時間が十分に確保できなかった。</p> <p>⇒校内研究の時間は、出張とうにより設定が難しかった。しかし、日頃より学習の内容や進め方に関して協議を設定することができた。</p>
参考資料	<ul style="list-style-type: none"> ・大分県立さくらの杜高等支援学校作成 年間指導計画 ・千葉県立高等支援学校流山高等学園作成 年間指導計画 ・中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編 ・GIGA ワークブックみやざき ・障害者職業総合センター作成 職業リハビリテーションのためのワーク・チャレンジ・プログラム
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・特になし

表11 D班(職業コース)

3 年間指導計画活用マニュアルの作成

完成した年間指導計画を教員全体で共有し、学部間や教科間での学びの連続性・系統性を確実に授業に生かすことを目的として、年間指導計画活用マニュアル(巻末資料1)を作成した。本マニュアルは、理論編、実践編、資料編、Q&A(よくある質問)の構成により、年間指導計画の意義や活用方法をわかりやすく整理している。

具体的には、教育課程の理解(学習指導要領に基づく年間指導計画の構造やねらいを整理し、全職員が共通の理解を持つこと)、授業づくりへの活用の促進(年間指導計画を授業づくりに結びつけ、根拠ある授

業づくりを支援すること)、日常的な課題解決の支援(実践編や Q&A を通して、授業や指導計画の運用上の疑問・課題に対応できること)、校内での持続的な教育改善の基盤づくり(教員間の情報共有と授業改善の循環を促進し、学校全体でのカリキュラム・マネジメントの定着を図ること)を目的に作成した。完成した年間指導計画活用マニュアルは全教科の年間指導計画と併せて綴じ、全学部に1部配布することに加え、全職員アクセス可能なデータベースに保存することとした。

以上のように、年間指導計画活用マニュアルが、年間指導計画を有効に活用するための具体的な手引きとして、教員の日常的な指導活動を支援するとともに、教育課程の系統性・連続性を保証するための校内基盤を整備することを期待している。

第5章 3年間の成果

本研究の3年間の取組を通して、学校全体におけるカリキュラム・マネジメントの基盤整備が大きく進展した。研究初年度である令和5年度は、小・中・高の学びの連続性が十分に確保されていないこと、教科や学部ごとに年間指導計画の様式が異なり、指導内容の系統性が不明確であるといった課題が明らかになった。この状況を改善するため、全職員を縦割りの研究班に編成し、学習指導要領の段階を踏まえた12年間の単元・題材配列表の作成に取り組んだ。これにより、学部間の情報交換が活性化し、児童生徒の学びを一貫して捉える必要性に対する職員の共通理解が深まり、学校全体としてのカリキュラムづくりの方向性が明確になった。

2年目となる令和6年度は、年間指導計画の様式の統一化と内容の精査に重点を置き、学習指導要領の構造に沿った計画の作成へと研究を発展させた。教科別に縦割りの研究班が組織され、各教科における指導内容の位置付けや学年段階の系統性を確認しながら、年間指導計画の具体化が進められた。特に、指導目標を学習指導要領の「内容」と対応させて整理したことや、3つの柱を可視化する工夫を取り入れたことで、計画と学習評価の連動性がより明確となった。また、作成された年間指導計画は学部間で共通の様式に基づくものとなり、従来のバラバラな年間指導計画から脱却し、学校全体として一貫した教育課程の整備へ向けた基礎が形成された。あわせて、校内研究や研修体制の充実を図ったことで、多くの職員が学習指導要領や参考資料の活用を意識するようになり、授業づくりの質的向上に寄与する成果が見られた。

最終年度となる令和7年度は、これまでに作成した年間指導計画の妥当性について授業実践を通して検証し、計画の改善につなげる段階へと研究を深化させた。全職員が「単元・題材計画シート」を基に授業計画を立案し、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何を身に付けるか」を明確にした指導の実践に取り組んだことで、年間指導計画と授業づくりの関係性がより強固となった。また、未作成であった教科や領域についても、B～Dの研究班により計画の作成が進み、学校全体の教育課程の網羅性と系統性が高まった。さらに、年間指導計画活用マニュアルを作成し、理論編・実践編・資料編・Q&A からなる体系的な手引きを整備したことで、年間指導計画を授業に生かすための具体的な方法や日常的な課題に対応する仕組みが明確となり、職員間の共通理解の深化と活用の促進が期待できる。

これらの一連の取組により、年間指導計画の共通様式の整備、指導内容の系統化、学習指導要領に基づく授業づくりの定着など、学校全体のカリキュラム・マネジメントに関わる複数の課題が体系的に改善された。とりわけ、小・中・高を通した学びの連続性の可視化と授業実践を通した検証の仕組みが構築されたことは、児童生徒一人ひとりの学びを支える教育課程の質の向上につながる大きな成果である。また、年間指導計画を学校全体で共有し、授業改善の循環を生み出す校内体制が整ったことで、今後の教育活動において持続的に発展可能な基盤を築くことができた。3年間の研究は、単なる計画作成にとどまらず、年間指導計画を根拠とした授業づくりと教育課程改善のサイクルが学校全体に浸透する段階へと発展し、研究主題である「今と将来をよりよく生きる子どもの育成を目指した教育の在り方」の実現に向けた確かな前進を遂げること

ができた。

第6章 今後の課題と展望

児童生徒がこれまでどの段階の年間指導計画に基づいて学習してきたかを、確実に把握し引き継ぐための仕組みづくりが、大きな課題として残された。現状では、学校全体で継続的に使用している検査やチェックリストなどがなく、児童生徒の実態把握に関する客観的な記録が不足しているため、学びの積み上げを十分に可視化できていない。研修後に行ったアンケート調査でも、児童生徒ごとの学習履歴を整理して残す方法や、学級ごとに年間の学習状況を一覧で管理する方法など、複数の案が示されており、今後はこれらの意見を参考にしながら、学びの記録を体系的に残す仕組みの構築を進めていく必要がある。学びの記録が整備されることで、児童生徒の学習の連続性をより確実に保障でき、年間指導計画を基盤とした授業改善にもつながることが期待される。

一方で、職員が授業を計画し実施するための基盤となる資料環境の整備についても、引き続き取り組むべき課題である。年間指導計画を活用した授業づくりを進めるには、各教科の単元案を蓄積し、誰もが必要な時に閲覧できる状態を整えることが重要である。福島県立相馬支援学校の事例にも見られるように、単元案の蓄積や授業参考資料の整備は、授業構想にかかる時間の短縮や職員間の共通理解の深化に大きく寄与する。本校においても、これまで作成してきた単元案や星本などの参考資料を整理し、体系的に蓄積していくことで、年間指導計画に基づく授業実践がさらに円滑に進む環境を整えていきたい。そのためにも、これらの取組を一過性のものにとどめず継続していくことが重要である。年間指導計画の活用を日常的な教育活動の中に位置付け、持続的な取組としていくためには、研修部だけでなく、校内での役割を分担しながら組織的に支えていく体制づくりが求められる。今後は、各分掌や学部等が連携しながら、それぞれの立場から年間指導計画の活用を支える仕組みを整え、学校全体で教育課程の運営に生かしていくことが今後の展望である。

【引用・参考文献】

- 文部科学省(2018) 特別支援学校教育要領・学習指導要領解説総則編(幼稚部・小学部・中学部) 開隆堂
- 文部科学省(2019) 特別支援学校学習指導要領解説総則等編(高等部) 開隆堂
- 文部科学省(2020) 特別支援学校小学部・中学部学習評価参考資料
- 文部科学省(2022) 特別支援学校高等部学習評価参考資料
- 福島県立相馬支援学校(2022) 「資質・能力を育むための単元研究会からのカリキュラム・マネジメント」